

記憶の価値からはじまる空間計画 岩手県大槌町における風景の再生に向けて

Spatial Planning for Collective Memory
— Toward Revitalization of Landscape in Otsuchi Town, Iwate Prefecture—

窪田 亜矢 東京大学 都市工学科 地域デザイン研究室
Aya KUBOTA

1. 地域文化資源としての「記憶」

千葉県香取市佐原は、利根川の支川である小野川と香取街道を交差するあたりに立地する歴史的町並みで、近世から近代初頭までの蓄積に触れることができる。商家町でもあり在郷町でもある。史跡になっている伊能忠敬宅やいくつかの県指定文化財の建造物等もあり、中心部分は重要伝統的建造物群保存地区にも選定されている。すなわち佐原の町並みは歴史的資源だといえよう。ここで歴史的資源とは、社会によって一定の高い評価が与えられ、だからこそ法的制度等による保存対象になっているものを指す。

佐原のまちづくりに何年か関わってきた。多くのインタビューにおいて語られたことは、かつては栄えてきた佐原で、通りが買い物客等でごった返すほどの賑わいを楽しんだ記憶や、清らかだった小野川で遊んだ記憶、その後、商業的な中心としては衰退していくときや観光地に変容していった過程を経験した寂しさなどであった。研究室の有志メンバーで、そのようなインタビュー調査を行い、結果をまとめたものを、2012年秋に「さわら昭和の記憶とくらし展」として発表した。その場にいらした方々が関連する記憶を次々に語り出したり、そうした記憶をもっていなかった方がしきりに関心を示したり、これまで知り合いでなかった

聞き書き地図

—佐原、賑わいの記憶たち—

昭和34年頃

昭和には大きなデパートがいくつかあり、遠くからもさんの方がやってきました。小野川はもともときれいで水遊びをする子供たちもいました。4月からの半年間、50代から80代のおよそ10名の方々に話を伺ってきました。皆さんの話を基に、昭和の始めから昭和までの、佐原の賑わいの記憶をまとめています。佐原はこれだけの賑わい、やがて来るたくさんの方々の人々を受けとめてきました。

駅前デパート

佐原の駅前といえば、3つのデパートが競合する賑わいでした。十字屋敷、富士ビル、セイメイ。一番最初にできた富士ビルの屋上は小さな遊園地のようになっていて、そこに連れて行ってもらうのが当時の子供たちにとって、日曜日のおでかけの楽しみでした。

横通りと親通

この二つの通りは、酒粕問屋の発展でも賑わっていた通りです。親通まつりや早稲刈り行が催されていました。

香取街道と小野川

佐原は香取街道と小野川という十字の輪に囲まれて発展してきました。小野川沿いの道は、同回廊と呼ばれました。小野川沿いには、舟屋に寄り添った暮らしの記憶が、香取街道沿いには呉服問屋、本舗、呉服店など生活に寄り添ったお店が多く立ち並んでいました。元々競争が激しく入居者も多かった香取街道ですが、戦後以降、経済のしくみが変わり、多くの商店は店を閉じてしまいました。

佐原と旅館

佐原にはたくさんの旅館がありました。ほとんどが佐原にきた旅人が泊まるという客入です。中でも、利根川沿いにある伊能邸。利根川のほとりにあり、利根川の風景を眺めながら泊まるという思い出が、多くの人に語り継がれてきました。佐原は色々な方々からたくさんの方々が訪れ、佐原の中心の賑わいでした。

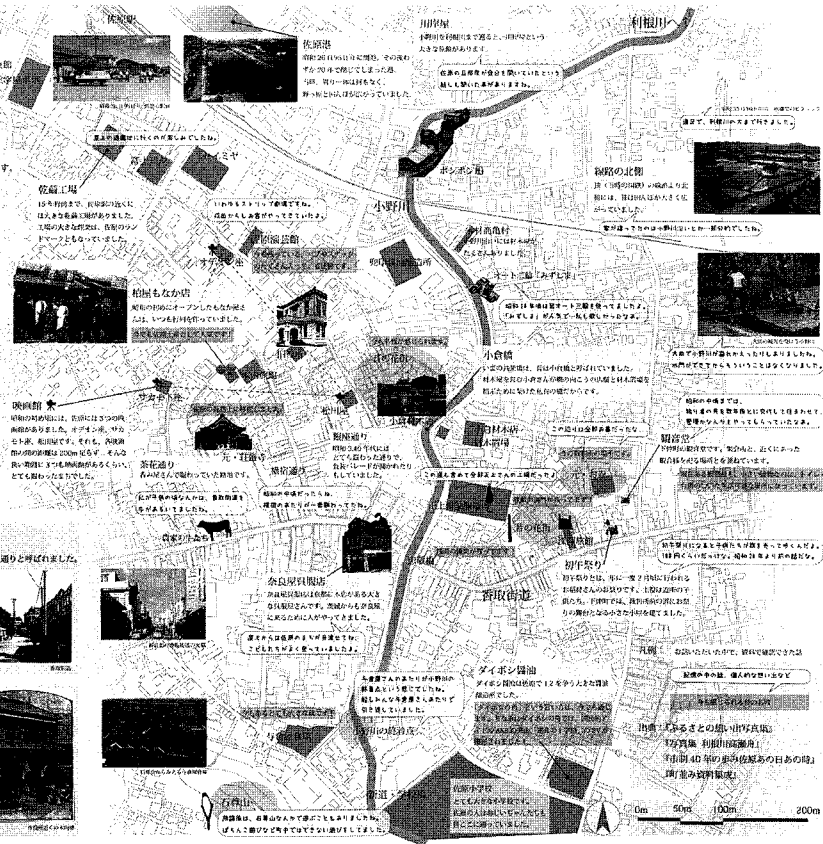


図1 商家町／在郷町である佐原の記憶を構成する空間⁶⁾ (図面作成：柏原葉那)

方が共通の話題を得て話をはずませるといった状況が生じた。生き生きとした場に驚愕した。「昭和のくらし」という近過去を実体験した方々が保持していた記憶を想起して、それを受けて、実体験をしていなかった方にまで記銘が生じたといえる。このような記憶の共有を可能にしているのは、佐原という商家町／在郷町だった歴史的町並みに他ならない⁽³⁾。

普段はわかりにくくなっていた町の価値を、記憶の共有を通じて地域社会が理解して実感した瞬間だった。

2. 現代社会における「記憶」の意義

土地が、食物や鉱物等を生み出せるような地形と地質を備えていて、それに気づいた人間や人間集団が棲み着き、集落を形作っていく。たとえば、農村においては、田畑を最適な位置に配置して、水を引いて温めて、災害をなるべく避ける最善の配慮を尽くしながら、豊かな農産物を得ることが重要だった。その目的のために膨大な工夫が積み重ねられてきた。そうした農村群の間には街道が引かれ、在郷町が形成されて、農産物の売買や加工が行われた。農村とは異なる生産のあり方が実現していった。近世の城下町においても、藩主には周辺の社会的物理的環境を読み解く能力が求められ、それが巧くいくと、城下町ならではの生活文化が創造されることになった。近代においては工業都市群が計画されることになったが、物流や交通網に多くを依った土地が高く評価されるようになった。

つまり、社会の生産性を向上させる可能性を持つ土地に、新たな価値の体系が見出されてきた。そのような価値の構築が繰返されてきたといえよう。

土地の生産性は、そこに関わる人や組織がないと顕現しない。人口がどんどん増加していった時代には、土地が開発されればそこには人は流入した。しかし、現代の日本においては、既に開発されている土地はたくさんあるものの、そこに手を加えて、従来の意味での生産性を上げようという人や組織が足りなくなっている。

そのような状況の中で、土地の価値を再構築することが問われ、その一つの答えとして、土地や空間に起因する記憶を手がかりにすることが考えられるのではないだろうか。

なぜなら、記憶がもたらす豊かさがあるからだ。その豊かさとは様々あるだろう。違う時代の生き方を学べるので自らの価値観が解放されるかも知れない。他

の人と共有できるものとしての価値もあるだろう。さらにそれが地域のアイデンティティになるかも知れない。また、地域社会は必ず危機に直面した経験を持つであろうが、それがどのように乗り越えられてきたのか、という点で、未来に対する示唆も得られるかも知れない。

そこからまた、必要な生産性を生み出すこともできるかも知れない。

特に、多くのものを失った被災地にとって、記憶が失われないうちに、鮮明なものとしていったん記録しておくことに意味があるのではないだろうか。

そこで、私たち、東京大学工学部都市工学科都市デザイン研究室+地域デザイン研究室らによる有志チーム(黒瀬武史助教と筆者は大槌町の復興コーディネーターでもある)は、大槌町において、記憶を記録する調査を行ったので紹介したい。大槌町は、震災前の人口が約15,000人、東日本大震災では1割近い方が亡くなり、被災棟数は3,800棟を越える。現在の人口は12,543人(平成27年1月末)。リアス式海岸集落群と中山間地域集落群によって構成される町である。かつては代官所がある町方や有力商家の前川家がある吉里吉里などで栄えた。漁業も盛んだったが、高齢化人口減少が続いている。津波常襲地域である。



図2 古写真や地図を介したインタビュー調査

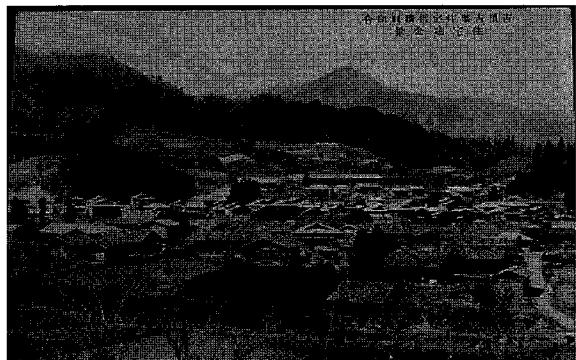


図3 昭和三陸大津波後に発行された絵はがき「吉里吉里住宅信購利組合住宅地全景」藤本氏所蔵

3. 吉里吉里における「記憶」の記録

大槌町吉里吉里集落においては、震災前の暮らしの風景に関する記憶をインタビューによって明らかにして、それを記録する作業を行った(2013年夏)。昭和三陸大津波の復興計画において造成された高台の住宅地は多くが流されたが、一軒残った元魚屋を借用した。

震災前の暮らしについて語られたこととして、個人の人生にまつわる重要な出来事(たとえば結婚等)の他に、人が集まっていた場所や集まり方や生業の在り方が挙げられる。

消防屯所や漁協事務所などという施設名を聴けば、集落全体の方が利用していたと想像してしまうだろう。もちろん施設名通りに利用することもあったが、同時に、町丁目毎の方々が集まるときにはそれぞれの町丁目にある施設をそれぞれが使っていたという実態があったことも明らかになった。施設計画を検討する際には、どういう単位で人が集まっていたのかを知ることは非常に重要なことであろう。被災によって人口数も変化し、災害危険区域の指定や移転等によって居住環境も激変し、財政上の配慮も考えると、町丁目毎に集会機能をもった公共施設を配置することは困難かも知れない。しかしそうした小さめの集団で使い勝手

の良いものにしたたり、アクセスを担保するような工夫は考えられるだろう。

より小さな集まりとしては、お茶っこがあった。お茶っことは、特に漁師の妻同士がお互いの自宅でお茶を飲みながら様々な話をするもので、2-3軒の集まりが多いようだ。毎日のように数時間にわたって色んなおしゃべりをするもので、養殖漁業だと夫婦で働くのでお茶っこ仲間にはなりにくい、一方、遠洋漁業の場合は、夫が数ヶ月帰ってこないことも多いのでずっとお茶っこを楽しむ妻も少なくないらしい。気軽に外から立ち寄れる縁側や居間で行われるものだという話も伺った。

頻度の少ない集まり方としては黒森神楽がある。三陸地方一体を廻るもので、宿と呼ばれる主が自宅を開放して踊り手に神楽を披露してもらい、それを集落の住民らが楽しむ。そのためには縁側に面した続き間があった方が良い。

このような生活に根付いた家の使い方は、実は丁寧に何えぼどんと語られるものであるが、うっかりしていると、全く配慮が為されないままに新たな家が設計されてしまう可能性がある。

また生業について、砂浜でのワカメ作業中に、ふと

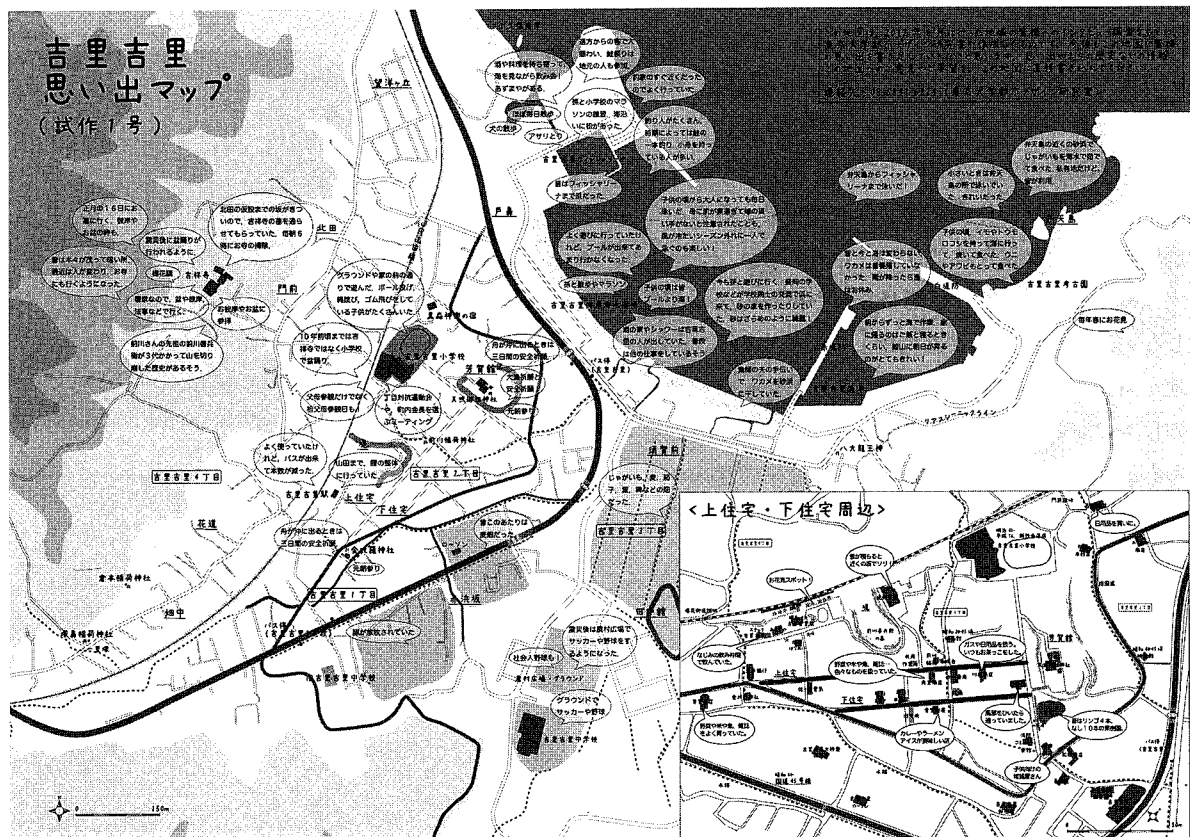


図4 大槌町吉里吉里の記憶を構成する空間⁶⁾ (図面作成: 福士薫+萩原拓也)

顔を見上げると鯨山が非常に美しく好きだった、と、率直な答えを返してくださった方がいた。砂浜は、震災後の祭りにおいて犠牲者の鎮魂のために最初の儀式が行われた場所であり、吉里吉里集落にとって非常に大切な場所である。こうした認識のもとで、防潮堤をなるべく陸側に下げることで砂浜部分を残す工夫が試みられたことは適切だったといえよう。

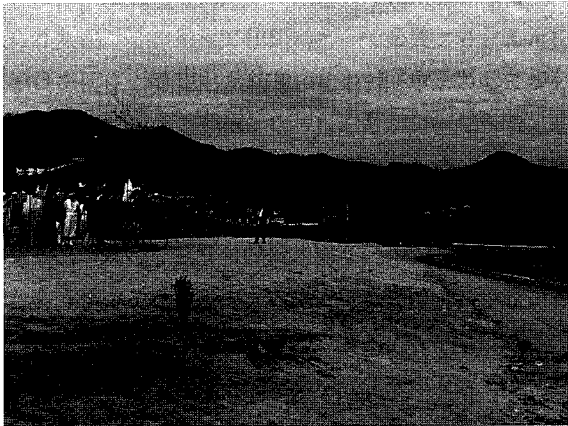


図5 吉里吉里砂浜：右奥にとんがっているのが鯨山

4. 「記憶」に配慮した空間計画

「記憶」が実際に生じた事実ではないことは十分あり得る。また震災前の「記憶」が全て重要なわけでもない。漁業者は激減し、既に土地から離れつつあったともいえる。特に1960年代の埋立地開発においては、津波の恐ろしさが忘れられていったことは明らかだ。そのような時代の遺産をそのまま引き継ぐのは良くない。しかし何が引き継ぐべき記憶で、何がそうではないのか、判断は簡単ではない。

よって、まずはどのような「記憶」があるのか、丁寧に記録することが大事ではないだろうか。そのうえで、どの「記憶」に価値を発見できるか、どの「記憶」を保持し、若い世代がそれを想起したら良いのか、主体的に関わりながら決めていくのが望ましいと思われる。なぜならイーファー・トゥアンの言葉でいえば「恐怖の景観」を記憶として、すなわち実体験として共有することができるのは、そのような空間が継承されているからだ。

空間というと、物理的側面だけを連想しがちであるが、社会的側面を包括的に捉え、計画の内容の実現まで、空間計画の射程に含まれることを改めて強調しておきたい。空間計画については既に多くの研究が為されつつあるが、片山・志摩(2007) 4pの整理によれば、空間計画spatial planningとは「土地利用計画よ

り広い概念であり、土地利用／物的計画が経済・社会・環境の発展政策と結びついて」いるもので、「協働、(空間における社会の在り方を示す) 枠組み、政策とアクションの連結など「統合」的アプローチを内在する」。

今、大槌町では物理的環境の再生としての復興計画だけではなく、空間計画が実現していくための仕組みの構築についても取り組みが進んでいる。具体的には各集落毎の地域復興協議会と呼ばれる議論の場である。

大槌町の赤浜集落における地域復興協議会にて、2014年度の最終回で今後の課題として挙げられた点に、縮退への対応や生業の創出があった。非常に重い課題ではあるが、いきなり産業が創出されるわけではない。赤浜での震災前の暮らしの記憶を大切にしている方々がもう一度ここで暮らしたいと思い、実際に暮らし始めることが第一段階である。そこからは、ささやかでも生業へとつながる芽を育てるという第二段階の空間計画が求められている。さらに、生業が成立した状態が、変化しながらも続いていけば、新たな風景が生み出される。それが復興計画の到達点ではないだろうか。

参考文献

- (1) 片山健介・志摩憲寿(2007)『地域の自立的発展に向けた空間計画の役割と地域ガバナンスの形成に関する研究 - 欧州の地域空間戦略の事例を通じた広域地方計画の課題』平成19年度国土政策関係研究支援事業研究成果報告書
- (2) 神原康介・窪田亜矢・黒瀬武史・萩原拓也・田中暁子(2014)『東日本大震災時における高齢者の緊急避難行動の実態と集落環境による影響—リアス式海岸沿い集落・赤浜のケーススタディー』日本建築学会計画系論文集701号, pp.1593-1602
- (3) 窪田亜矢(2014)『水郷の商都・佐原における「記憶の枠組み」についての研究—「歴史的なもの」との関係性をふまえた考察』日本建築学会計画系論文集705号, pp.2443-2452
- (4) 黒瀬武史・萩原拓也・瀬川明日奈・道喜開視・窪田亜矢(2013)『平衡の道筋』日本建築学会技術部門設計競技「次世代に継ぐ住宅の再建計画—東日本大震災からの復興」佳作受賞
- (5) 東京大学佐原PJチーム(2014)『楽しめる「まちなか」の場づくりへ—多主体による確かな一歩—』
- (6) 東京大学大槌PJチーム(2014)『受け継ぐ吉里吉里、立ち上がる赤浜—大槌町の伝統・文化にもとづいた復興都市デザインの提案』
- (7) 東京大学大槌PJチーム(2013)『吉里吉里のすまい』